

SAKURASOH PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH PRIMULA SIEBO
OH PRIMULA SIE
LDII SAKURASOH
PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH PRIMULA SIEBO

さくらそう通信

4号
1997.2.10



田島ヶ原のサクラソウとノウゼンカズガサ

田島ヶ原のサクラソウと昆虫の不思議 (2)

磯田 洋二

今回は、前号でご紹介した田島ヶ原サクラソウ自生地の謎について詳しくご説明します。

(1) の、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫については、1988年に群馬県新里村指定天然記念物「赤城のサクラソウ自生地」で、浦和市教育委員会の文化財保護課の方と一緒に調査して、ここではマルハナバチがサクラソウの花粉を運ぶ有力な昆虫になっている

ことを確認しました。その後、秋が瀬の「田島ヶ原サクラソウ自生地」でも、サクラソウの花の最盛期が過ぎた頃に、クロマルハナバチが盛んに花粉を集めにきていることを確認しました。どうやら、マルハナバチ類がサクラソウの花粉を運ぶ昆虫の一つであることは、間違いないようです。しかし、マルハナバチ類の蜜や花粉を集める行動はかなり乱暴で、

サクラソウの花に傷をつけてしまうことがあり、とても花のつくりに適応して花粉を運んでいるようにはみえません。マルハナバチ類の他に、もっとサクラソウの花のつくりに適応した花粉の運び屋がいなければ、サクラソウが二通りもの花のつくりを進化させたことの説明がつかないという、あらたな謎が生まれています。

(2) の、サクラソウの咲く頃の秋が瀬には、昆虫が少ないことの原因については、まだ解っていません。秋が瀬の田島ヶ原では、現在では冬に野焼きをするので、その影響があるかも知れませんが、野焼きをしないときからのことなので不思議です。サクラソウの花の最盛期を過ぎた頃から、クロマルハナバチがやってきたり、さまざまな昆虫が豊富に見られるようになることから、北西の冷たい風が吹き抜ける秋が瀬は、周辺にくらべて暖かくなるのが遅いためではないかと考えたりしています。

(3) の、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいないのに、秋が瀬でたくさんの種子が実るのはなぜかということについては、いろいろなことが解ってきました。一つは、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいないのではなくて、そのような昆虫がいてもなかなか目に触れないということです。田島ヶ原で観察したクロマルハナバチの場合は、すでに周りにノウルシやオギが茂っていたために、目の前に飛んでこない気が付きませんでした。もう一つは、サクラソウの種子が実るためには、花のつくりの異なった花粉によって受粉することが必要で、自分の花粉で受粉しても、種子が実らないのが普通です。しかし、中には自分の花粉で受粉して、種子がよく実る個体もあるのです。秋が瀬の「田島ヶ原サクラソウ自生地」にも、自分の花粉で受粉して種子を实らせることのできる個体がかなりありますから、花粉を運ぶ昆虫がいないとしても、たくさんの種子が実るといわけです。しかし、これで謎解きが終わった訳ではないのです。田島ヶ原のサクラソウを調べて見ると、サクラソウの花の最盛期になる前の、まだクロマルハ

ナバチの現れないときに、なぜかどの花にも自分以外の花粉がかなり付着しているのです。だから種子がよく実るのかも知れません。それでは、この花粉がどのようにして運ばれてきたのか、ここでもあらたな謎が生まれています。

ところで、最近のテレビ・新聞・書物には、「田島ヶ原サクラソウ自生地の周辺で開発が進んだ結果、花粉を運ぶ昆虫が少なくなり、種子をつけない個体が増えてきたので、サクラソウ群落の存続が困難になった。」というような情報が目立つようです。田島ヶ原では、花粉を運ぶ昆虫の種類と量的な変化や、種子を付けない個体数の変化がわかるような調査は、これまで行われたことはありません。そして、田島ヶ原のこれらの情報の根拠になった資料をみたこともありません。上で今まで述べてきた真実とほど遠いこれらの情報は、自然保護のありかたに対する警鐘として出されたものかも知れません。しかし、いまでは情報が一人歩きを始めています。マスコミの流した誤った情報を訂正することは、極めて困難なことだと思いますが、正しい情報の提供を続けることで、やがては社会に正しく理解されるようになると思います。まずは、手始めにこの紙面を拝借して、正しい情報を発信しましたので、ぜひ、この正しい情報を周りの人々に伝えてくださると幸いです。

まとめになります。田島ヶ原サクラソウ自生地を保護していくためには、サクラソウのことだけではなく、他にも解明しなければならないことがたくさんあります。それには多くの時間・費用・労力を必要としますが、なにより大切なことは、科学的な調査や実験に裏付けられた正確な情報を得ることです。間違っていたり不正確な裏付けによって保護対策が行われた場合には、浪費したり、効果があがらないばかりか、「田島ヶ原サクラソウ自生地」の価値を著しく低下させてしまう恐れさえあります。「田島ヶ原サクラソウ自生地」の保護や管理に関わるには、このことを肝に銘じておかなければならないと、つくづく感じました。(浦和市文化財保護審議会委員)

田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査

浦和市教育委員会では、田島ヶ原サクラソウ自生地において成育状況の実態調査などを行い、その結果をもとに、自生地の保護保存にあたってきましたが、いよいよ平成8年度からは国庫補助事業として、「特別天然記念物田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査」を開始しました。田島ヶ原のサクラソウ自生地は、荒川流域の他の自生地が消滅していく中で、地元の方々の保護に対する熱意に見守られて、

戦中、戦後の混乱期、そして開発が激化した高度成長期を切り抜け、生き延びてきました。この自生地を、さらに科学的な資料に基づいた計画のもとで、現状維持のレベルから一歩前進させようという事業、それがこの「保護増殖実験調査」です。

初年度である平成8年度は、別表の委員による検討委員会を2回予定し、10月8日の第1回会議では、現地視察をはさんで、保護増殖実験調査の全体計画及

び8年度実施内容の検討を行いました。そこでは、自生地の現状、特に乾燥、帰化植物などの障害要因とその除去対策、また、増殖を図る上での留意点などが活発に検討され、具体的な事業として、9年度より予定している育苗に備えての圃場整備などを実施することが決定されました。また当日は、文化庁記念物課の蒔田史明調査官と、埼玉県教育委員会文化財保護課柳正博主査に、助言者としてご出席いただきました。会議冒頭に蒔田調査官から、現状から判断

して自生地には今後も人為的な管理が必要であることから、この事業については、長期的な計画に基づく目標を設定し、その上で今何をすべきか、何ができるかを考えることが望まれる旨の発言がありました。事務局を含めた出席者一同、この事業が田島ヶ原サクラソウ自生地の将来を左右するものであることを、あらためて認識させられました。

なお、保護増殖実験調査については、今後も紙面でご紹介していきます。

保護増殖検討委員会名簿

氏名	職業等
磯田 洋二	浦和市文化財保護審議会委員
大垣 晃一	前東京バイオテクノロジー専門学校講師
岡村 正雄	埼玉さくらそう会会長
小杉 昭光	埼玉県文化財保護審議会委員
佐々木 寧	埼玉大学教授
竹花 芳男	埼玉さくらそう会副会長
石井 正夫	浦和市都市計画部参事 埼玉さくらそう会常任理事
石塚 紀男	浦和市教育委員会社会教育部長



検討委員会 第一回会議

サクラソウ関係図書紹介 (2)

天然記念物解説

三好 学著

富山房発行 大正15年 A5判 502ページ 上製本

口絵は、彩色画一枚であるが、それが、サクラソウである。「桜草」とあり、「野生桜草の花の変化」を示している。大正8年(1919)史跡名勝天然記念物保存法が公布され、大正9年に最初の指定が内務大臣によって行われ、その中に田島ヶ原サクラソウ自生地は、「土合村桜草自生地」の名で含まれたが、本書は、天然記念物そのものを解説し、大正15年までに指定されたもののすべてに未指定のものを加えて一つ一つ説明が加えられている。「第5編 天然記念物の実例」のうち「17固有なる原野植物群落、(1) 桜草原野」で、「或る大きい河の氾濫区域で年々泥水を蒙る処に固有の原野がある。斯かる原野の中に桜草 (*Primula Sieboldii* E. Morren) が一面に発生して美観を呈する処が見られる。これを桜草原野 (*Primula plain*) と名づける。」とある。そして、荒川沿岸のサクラソウ自生地について現況を述べ、「土合村桜草自生地」について解説し、「(2) 桜草の花の変化」、「(3) 桜草の保存」について記述されている。また、写真も内務省提供の「田島原の桜草自生地」が掲載されている。

THE GENUS PRIMULA In Cultivation and The Wild (サクラソウ属 園芸と野生)

Josef J.Halda著 Jarmila Haldova絵

Tethys Books (アメリカ・コロラド州) 発行1992年 A5判 364ページ ペーパーバック

題名どおり、サクラソウ属すべての植物を1種ずつ図示し、命名、形状、分布、環境など詳述している。サクラソウ属を11の亜属 (Sub genus) に分け、アウガンスス亜属、コルツソイデス節に、サクラソウ (*P. sieboldii*) がある。序言によると、著者は、この本を作るのに30年以上も世界中を巡り、40万点以上の植物標本を実見しており、手はじめは、サンクトペテルブルグ (旧レニングラード) にあるアジアの植物標本の最大のコレクションを調べたということであり、さらに、北京、エジンバラ、モスクワ、パリ、プラハ、タシケント、ウィーンなどでも調査しているということである。カラー写真も30葉、グラビアで掲載されている。



青木氏と彼のご家族が、ホテルではなく自分たちの小さな家に泊まるよう申し出てくださったその時、日本を訪れ、かの地で「サクラソウ」と呼ばれている種類のプリムローズを見るという私の夢が、ついに現実のものとなることを確信しました。私は、このプリムローズに魅了され、約250もの品種を、種子から育ててきました。自分でもこの成果には大変満足していますが、さらに、日本の約10人ほどに、種子を送って欲しいという手紙を書いたこともあります。この申し出は、ご丁寧なお返事と共に、サクラソウの種子と苗とを私にもたらしくれました。青木氏は種子こそ持っていませんでしたが、浦和市にある田島ヶ原のプリムローズを見にくるよう誘ってくださったのです。私は大変嬉しく思い、日本語



ヘルドさんが市内で採集したサクラソウ(同氏撮影)

がわからない私のために計画を立ててくださるよう、早速彼にお願いしました。

青木氏が私のために立ててくださった計画が、いかに素晴らしいものであるか知った時の私の喜びは、うまく表現できません。青木氏は、私が先の国際サクラソウシンポジウムで知り合いになった、大垣氏と一緒に、空港まで出迎えに来てくださいました。お二人とも、長い空の旅の疲れが取り易いように、気遣ってくださいました。青木氏の奥様と二人のお子さんも歓迎して下さり、私がくつろげるよう計ってくださいました。浦和での毎日は興味深いことの連続で、学ぶべきことがいっぱいでした。そして、いよいよ浦和市の要人とサクラソウにお目にかかるという日のことです。駅に向かう道すがら、私の眼はマンホールの蓋に釘付けになりました。そこにはサクラソウがデザインしてあったのです。私は今、間違いなくサクラソウの街、浦和市にやってきたのだと確信したのです！ 他の街では、こうしたデザインには、自治体の頭文字を使い、自治体の名称を漠然と思い起こさせようとするでしょう。しかし浦和市のデザインは、想像力をかきたてる芸術品であるとともに、市が、市民とそして街ができる運

か以前から自生している植物に、いかに敬意を払っているかをも示しているのです。

どの駅にも、サクラソウの花壇や展示があり、浦和市在住の埼玉さくらそう会会員によるボランティアによって維持されていました。コンクリートと鋼鉄の中で、自然を見られるのは美しいものでした。また、これらの展示品は人々に対して啓蒙するだけでなく、人間が持つ自然への愛と敬意をも示しているのです。浦和市街の中心にある駅で電車を降りると、学校に通う子どもたちは、壁に描かれた抽象的なサクラソウのシンボルを目にするでしょう。一步駅の外に出れば、野生のサクラソウが大きく描かれた広告看板や、建物を飾るサクラソウ自生地のモザイク画に迎えられるのです。そして、その日「さくら草まつり」会場までの短い旅に、私たちを運んでくれたバスも、サクラソウの絵で飾られた特別仕立てだったのです。

サクラソウ自生地、その美しさと言ったら！ ただ私には、ノウルシの繁殖がサクラソウを圧倒してしまいそうに見えたので、それを排除してはどうかと青木氏に提案しました。しかし、彼はサクラソウもノウルシも、共に保存することが、彼の仕事なのだと説明してくれました。「さくら草まつり」の内容は、若者もお年寄りも問わず、すべての人にサクラソウとの出会いをもたらしていました。まさに驚くべき一日でした。

様々な種類の自然のサクラソウを見学した後、愛好家が育てた美しい栽培種を展示している、野外の展示場を見学しました。その際に、浦和を訪問することが出来た嬉しさについて、コメントする機会が与えられました。私がアメリカで育てた品種のいくつかを見てもらったことがある埼玉さくらそう会の指導者とも、運良く会うことができました。

私はまるで外交官のような歓迎を受けたのです。

Paul Held (訳 K.Megumi)

さくらそう通信

平成9年2月10日

編集・発行 浦和市教育委員会

浦和市常盤6-4-4

☎048-829-1796

印刷 関東図書株式会社



題字 教育長 浅見 匡